

開催に関して賛否両論があった東京オリンピックでしたが（パラリンピックは開催中ですが）オリンピックでの日本選手の活躍は連日素晴らしいもので逆転・大逆転など、感動・大感動の連続でした。期待と裏腹に予選や1回戦で負けた選手にも数々のドラマが明かされ、こちらでもまた感動・大感動の連続でした。勝っても負けても感動があったのは、選手一人一人のこれまでの取り組みできた姿勢・努力・思いがとてとても並々ならぬものであったためだったと思いました。

現在園児の子ども達にとっては、後から、大人になってから、オリンピックが開催されるごとに、今回の東京オリンピックを知ることになると思います。そのとき、今回の選手の活躍が、コロナ禍での開催が、どのように受け止められるか、今の私にはわかりませんが、全部がよかった、または、全部が悪かったという受け止め方だけではないように思います。今回の頑張りが、涙が、励みになってくれればと願います。

2学期が始まりました。今学期の大きな行事は11月開催の生活発表会です。1学期の運動会同様、またはそれ以上の園児の活躍・成長が楽しみです。他にも行事や活動がいろいろあります。楽しみです。

さて、今現在は8月10日の午後です。午前中は、リモート研修でした。約1時間半の研修でした。とても勉強になり「ぜひ、皆様にも」と思ったのですが、パワーポイントで76ページのレジメをそのまま掲載することもできませんし、そのままでは、読まれることがないと思われるので、どのようにして紹介するかを悩んでいましたら、パワーポイントの1ページ目で、すべてが凝縮されていることに気づきましたので、1ページ目をもとにかいつまんで紹介させていただきます。

講師は、東京大学大学院教育学研究科教授 遠藤利彦先生です。タイトルが『現代の「チーム保育」における園の役割とは』～乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達～です。「チーム保育」…子どもは生物学的実体としてはきわめて脆弱（ぜいじゃく…もろくて弱いこと）であり、養育の負担が非常に大きい。そしてだからこそ、母親単体での子育ては土台無理で、集団として共同ケアしなければならない。→父親の参入→「おばあさん」の参入→「集団共同型子育て」→幼稚園の必要性・意義

「アタッチメント」…母親と子の間に形成される愛情。愛着。親子関係の基本は「アタッチメント」。大切なのは、親が子どもに何か特別なことをしてあげることでは必ずしもなく、子どもにとって確かな信頼できる「避難所」と「基地」であること。子どもは容易に怖がる・不安がる存在。そして泣きながら身近な誰かにくっつくこととする。くっついて安全感・安心感に浸ろうとする。一日に何回も繰り返される至極当たり前のこと。しかし、これがいかに確実に安定して経験できるかが、生涯に亘る心身の健康な発達の鍵になる。アタッチメントはスキンシップではない。大切なのはただ、どんな時もぶれずに遇直に「安全な避難所」/「安心の基地」であること。たくさん、長く抱っこしてあげるのではなく、子どもの感情が崩れた時にはそれを受け止めて、共感しつつ立て直してあげること。そして、元気になったら、自分のもとに留めておかずに、一人で、あるいは仲間と自発的に遊べるよう、ちゃんと背中を押してあげること。

「非認知（能力）」…「非認知能力」とは、認知能力以外の能力を広く示す言葉で、テストなどで数値化することが難しい内面的なスキルを指します。具体的には「目標を決めて取り組む」「意欲を見せる」「新しい発想をする」「周りの人と円滑なコミュニケーションをとる」といった力のことで、子どもが人生を豊かにする上でとても大切な能力であるといえます。乳幼児期ではこの能力がとても重要であることが研究で明らかになっています。幼稚園のよいところとして、「ちゃんとした人がいる。毎日、ちゃんとした先生がいてくれる。あたたかい感情をもった人。一貫した関係。しくしく泣いている子がいたら、なぐさめて楽しませてくれる。毎朝、必ずそこにいる。人って信じていいのかも。親に限らず、無条件に自分を受け入れてくれる」と思えるようになるところ。

今現在は、8月12日の午後です。上の行までを午前中に書き終えました。実は、迷ったのです。続きを10月号にするか、2ページ目に突入するかで。文字ばかりの2ページは、読まれなくな

ってしまう可能性が高いと思うので。実は、先ほど「10月号」として3行ほど書いたのですが…。2ページ目に突入することにしました。

実は、8月10日、家に帰ってから、録画しておいた高校野球の開会式を視ました。開会式を録画するようなことはこれまでありませんでしたが、事前に山崎育三郎さんが甲子園の開会式で歌うということを知っていたからでした。山崎育三郎さんとは昨年のNHKの朝の連続ドラマ「エール」に出演されていた方です。ドラマの中でも甲子園球場で「栄冠は君に輝く」のシーンがあり、そのシーンがとってもよかったので、それこそ本番でも視れる、聴かれると思って録画したのでした。民放でも放映するというので、NHKと民放と2つ録画しました。

録画されていた番組の最初を視ました。開会式に先立ち山崎育三郎さんが独唱しました。圧巻でした。次に49代表校の一斉行進がありました。行進が終わりました。

司会者…「さて山下さん、49代表校の一斉行進いかがでしたか」

山下元星稜高校監督…「そうですね。49校のベンチ入りのメンバー882名の入場行進を見まして、本当に感動しました。ただ、テレビを見ている高校球児、来れなかった高校球児たちにね、“人生は敗者復活戦”なんですよ。これから勝負なんです。この悔しさを忘れずに、あの、ぜひ、将来にですね、グラウンドで鍛えた人間力と涙を忘れずに、将来必ずいいことがあると信じて、がんばってほしいなと思いますね」

衝撃が走りました。ぐっときました。涙があふれ出しました。

“人生は敗者復活戦”

これまで私が模索していた言葉でした。例えば運動会でのかけっこの意義、負けても価値があること、人生の意義など全てをひっくるめて、実に人生を言い当てています。高校野球に限らず、もちろんオリンピックに限らず、中体連やスポーツ少年団の試合に限らず、幼稚園でのゲームに限らず、試合には、ゲームには、「勝ち」と「負け」がついてきます。多くの人は負けます。勝ち続けるのはたった一人、一団体。なのに毎年、いや日々繰り返されます。人生では、負けること、つまずくこと、壁に当たること、思うようにいかないことの方が多いです。勝った人も、成功をおさめた人も、それまでの負けを糧にして、つまずきを糧にしていることがほとんどではないでしょうか。

負けたから終わりでないということ。むしろ、そこからが本当の勝負であるということ。

山下元星稜高校監督とは、元巨人軍・ヤンキースの松井秀喜を高校時代育てた元監督です。余談を2つ。一つは、大学時代は、選手ではなく球拾いだったそうです。もう一つは、松井秀喜の野球選手としての能力がすごいことを知り、松井選手に何をさせたかということ、「読書」だったということ。天狗にならないよう、読書をさせたということでした。心を鍛えたということでした。・・・だから、甲子園大会で5打席連続敬遠されても大人びた振る舞いができたのだと思いました。

ついでにもう2つ。大学時代野球が苦しくて勉強もわからなくてやめようと思って能登（故郷の門前）へ行ったとき、朝5時になったらおふくろがいなくなったので、親父は大学1年の時に死んでいるので、後を追っかけたら、てんびん棒をかついで魚を1軒1軒行商していた。その姿を見たとき「あー、これだな！」と思った。（将来は）背中で引っ張れるような教師になりたい。背中で引っ張れるような監督になるぞ、ということで帰ってきた。あれを見なかったら、25回甲子園に行けなかったと思う。

大学のときは球拾い。自分がそういうふうな下積みばかりやってたから、子ども達には「補欠の子どもは世の中に出て“心配り” “目配り” “心配り”ができるからお前の方がレギュラーよりも出世するよ」と。補欠の方から進学・就職とか全部、僕が保証人になるからということをお願いに行っていた、ということ。

そういえば、オリンピックの野球で優勝した稲葉監督は、小さいころいじめにあったことを話されていました。「弱い人間だったから、人の気持ちがかかってあげられるようになった」と。

話は前後しますが、開会式を2つ録画しておいて本当によかったと思いました。ちなみに、山下元星稜高校監督は、民放の方のゲストでした。（放送局にもそれぞれのよさがあります）

で、あらためて思ったのでした。

一つのこと、ひたすら汗をながしたならば、“栄冠は君に輝く”と。

そして、山下元星稜高校監督のお母様は、“最高のアタッチメント”だったと。そして、山下元星稜高校監督が大切にしたのも“非認知能力”だったと。